

# 2023 年を振り返って

全国病弱教育研究会 会長 斉藤淑子

いよいよ年末を迎えました。この 1 年を振り返ると、私たちの会にとって、勇気づけられたこと、考えさせられたこと、また元会長の鈴木茂先生のご逝去など、さまざまなことがありました。ここでは、3 つのことについて振り返りたいと思います。

はじめに鈴木茂先生に感謝をこめて、追悼の言葉を述べさせていただきます。

鈴木先生は、1998 年に初代会長の藤井進先生からバトンを引き継ぎ、本会の発展にご尽力してくださった大先輩であり、私にとっては病弱教育の道に導いてくださった恩人でもあります。先生は、1960 年に品川区立小学校の「特殊学級」、次に杉並区立堀之内小学校の「自閉症児を対象とする通級制の学級」、杉並区立済美養護学校(知的障害)、都立北養護(肢体不自由)教頭、そして 1990 年に都立久留米養護学校校長として勤務され、全国病弱養護学校校長会会長としてもご活躍されました。

私は 1993 年に鈴木先生のご退職と入れ違いに久留米養護学校清瀬分教室に着任しましたので、直接ご指導を頂く機会はありませんでしたが、研究会等で度々お目にかかりました。鈴木先生の穏やかな口調と笑顔は、今なお鮮明に心に残っています。

ご逝去の報に際し、改めて先生のご著書「堀之内学級の誕生とその成果(改訂版)」(2011)を再読しました。この本は、1969 年から 10 年間携わったご自身の教育実践を丁寧にまとめたものです。野村東助氏(元東京学芸大学教授)は、巻頭言で次のように鈴木先生の奮闘を讃えています。

「堀之内学級は、新設された情緒障害特殊学級の第一号であり、自閉症を主たる対象とする我が国初の特殊学級として 1969(S44)年、東京都杉並区立堀之内小学校に誕生した。(中略) 興望を担っての登場であったが、前例のないところに道を拓くさきがけの宿命であろうか、堀之内学級が歩んだ道は決して平坦ではなかった。次々と難問が立ちはだかり、様々な疑問に突き当たり、外部からの苦言や要望を受けとめながら、新たな模索と挑戦が続く激動の十年であっ

た。」

また、東京都の全員就学は 1974 年にスタートしましたが、鈴木先生は、「教育は子どもの権利であり、差別を許してはならない」と、「堀之内学級では 1972 年度に情緒障害児学級への通級を希望する自閉症児全員を受け入れることにしました」(p42) と述べています。

改めて、鈴木先生は日本の特殊教育・特別支援教育実践と教育保障のフロンティアだと思いました。「子どもたちをとことん信頼するとかならず応えてくれる」(p178)、「子どもたちに、**安心、安全、爽快な場所**だよと認識させることが学習の第一歩と考える」(p48) という先生のお言葉を、私たちはしっかり受け継いでいきたいと思いました。

二つ目は、振り返りと言うより、反省です。香川の NPO 法人未来 ISSEY 様や会員の後藤恵子さんと連絡を取りながら次年度に香川大会を開催しようとしてきました。しかしながら、コロナの影響もあり、現地の教育現場との連携がうまく進みませんでした。全国事務局としては、本会が教育実践を大会の大きな柱に掲げてきただけに、もう少し時間をかけて現地の教育・医療・福祉関係者や当事者をつながりをもっていく必要があると考え、大変残念ですが、香川大会を延期することとしました。

次の大会開催についてはまだ検討中ではありますが、山梨での開催に向けて準備を進めているところです。

三つ目は、「東京の病弱教育の主人公たち作品展」を東京の人形町と山梨県の都留文科大学で開催できたことです。都留文科大学での開催の様子は、佐藤比呂二先生が詳しく紹介してくださっていますので、ここでは人形町の作品展について振り返ります。

実は、私は 2020・2021 東京大会 web 作品展開催、2022 年作品集制作によって、この取り組みはひと段落したとっていたのですが、中野壮一郎君とご家族の強力なご支援で、東京のド真ん中の人形町のギャラリーで5日間、約100名の参観者を得て開催することができました。当日は、実物の書初め、手芸、絵、作文7点が加わり、さらに迫力がUPしました。HPで知って来てくださった方、会員や友人の方、ギャラリー関係者や通りがかった方など色々な方が参観してくださいましたが、とりわけ作品を出品してくださった元児童生徒さんやそのご家族が、たくさん来てくださり、大変うれしかったです。

「5号のくじら」を出品してくださった吉永マルクジェイ君のご一家も来てくださいました。実は弟さんはジェイ君が亡くなった時、まだ生まれたばかりで、お兄ちゃんのごことはよく知らなかったそうです。でも、ジェイ君の作品を見て、それにまつわるエピソードや分教室での様子を話すなかで、改めてお兄ちゃんの優しい人柄を感じていました。妹さんも、談話室できょうだい支援ボランティアの井上るみ子さんに遊んでもらったことをよく覚えていて、将来は看護師さんか保育士さんになりたいと夢を語っていました。「あなたたちのお兄ちゃんは、とても友達思いの優しい子でしたよ。」と、話しかけた時の二人のうれしそうな顔がとても印象的でした。

子どもたちの作品の持つ力強さ、ナラティブの大切さを改めて感じる事ができました。さらにいろいろな場で作品展を開催し、学びの中で輝いた子どもたちの姿を伝えていきたいと思っています。